

新ラテンアメリカ映画祭グランプリ受賞

FRIDA
naturaleza viva

恋と芸術と革命に生きた女

フリーダ・カーロ

監督=ポール・ルデュク

出演=オフェリア・メディーナ/フワン・ホセ・グロラ/クラウディオ・ブルック

メキシコ映画/1984年/カラー/108分

配給=ケーブルホグ



フリーダ・カーロ

(スタッフ)

監督……ポール・ルデュク
 撮影……アンヘル・ゴデー
 ジョゼ・ルイス・エスバルザ
 美術……アレハンドロ・ルナ
 製作……マヌエル・バンバチャーノ＝ポンセ
 (キャスト)

フリーダ・カーロ……オフェリア・メディーナ
 ディエゴ・リベラ……フワン・ホセ・グロラ
 シケイロス……サルバドール・サンチェス
 トロツキー……マックス・カーロフ
 フリーダの父……クラウディオ・ブルック
 1984年/メキシコ映画/カラー/108分



フリーダ・カーロ年譜

■1907年 ドイツから移民したハンガリー系ユダヤ人の父と、スペインとメキシコ原住民の血をひく母の間に生まれる。
 ■1913年(6歳) 小児麻痺を患い、後遺症として右足が不自由になる。
 ■1925年(18歳) 乗車中のバスが路面電車と衝突。脊椎や骨盤、右足の骨折、バスの手摺が子宮を貫通する瀕死の重症を負う。後遺症のため以後、生涯32回の手術を繰り返す。療養中に初めて絵筆を握り、生涯に約200点の作品を残す。
 ■1929年(22歳) ディエゴ・リベラと結婚、リベラ43歳、フリーダ22歳。

9月 母、マティルデ・カルテロン死去。流産をテーマにした「ヘンリー・フォード病院」、出産をテーマにした「私の誕生」制作。
 ■1934年(27歳) 中絶。夫リベラと妹クリスティーナの密通に苦しみ。
 ■1935年(28歳) 5月 リベラと別居。7月 ニューヨークへ単独旅行。彫刻家イサム・ノグチとの恋。夫と妹の密通から受けた痛手をテーマに「ちょっとした刺し傷」制作。
 ■1936年(29歳) リベラと共にスペイン民兵グループ支援活動に参加。
 ■1937年(30歳) 1月 レオン・トロツキー夫妻メキシコに到着。トロツキーとの恋。
 ■1938年(31歳) 4月 アンドレ・ブルトン到着、サンアンヘルのリベラ家に滞在。11月 ニューヨーク、ジュリアン・リーヴィ画館で個展。写真家ニコラス・ムライとの恋。
 ■1939年(32歳) ブルトンの招きにより、ニューヨークからパリへ。4月 帰国。12月 ディエゴ・リベラと離婚。リベラに愛されている自分と愛されていない自分をテーマにした「二人のフリーダ」制作。
 ■1940年(33歳) 12月 リベラと再婚、このころ自画像を多数制作。
 ■1942年(35歳) ニューヨーク近代美術館「20世紀肖像画展」に出品。
 ■1946年(39歳) 6月 ニューヨークでの外科手術で椎骨接合手術を受ける。
 ■1950年(43歳) 骨の症状悪化のため英国病院(メキシコ市)に入院。
 ■1953年(46歳) 4月 現代美術館でメキシコでの初の個展開催。
 ■1954年(47歳) 4月 入院。7月3日 アメリカへの抗議デモに参加。「生命万歳」制作。
 7月13日 肺塞栓症のため死去。

「女、そのものでありながら女、を超えて生きたフリーダ
 あなたは幸せだった……………」

河原晶子

まるでパッキリと大きく開いた傷口からしたたる鮮血のような、赤く熟れきった西瓜。その断面には、こう文字が刻まれている。「ヴィヴァ・ラ・ヴィダ(生命万歳)、フリーダ・カーロ、と。これはフリーダが47歳で亡くなる8日前に描かれた静物画だ。「ヴィヴァ・ラ・ヴィダ」とは、まさに彼女フリーダにとっての絶筆だった。

フリーダ、あなたはなんて幸せな女だったの!と私はあえていいたいと思う。とんでもない、と人は言うかもしれない。6歳の時に小児麻痺を患い、18歳の時には彼女の乗ったバスが路面電車と衝突して脊椎や骨盤、子宮に重症を負い、事故の後遺症の絶え間ない手術や中絶、流産などをくり返したという、文字通りの女の悲劇を一身に引き受けてしまったフリーダの想像を絶する苦悩をさしおいて、なんてフリーダが幸せだったなどといえるのだろうか!そう、私にはそんなフリーダが幸せだったなどといえる資格はこれっぽっちもないのだ。それでもあえて、私は思いたい。フリーダは幸せだったのだ、なぜなら、フリーダには彼女の魂の分身ともいえるディエゴ・リベラがいたのだから。

ポール・ルデュクの映画「フリーダ・カーロ」は、メキシコ・シティにある国立宮殿の大石のホールにおかれたフリーダの白い棺の傍にたたずむディエゴ・リベラの姿で始まり、そしてそのディエゴの「フリーダ、!という絶叫で幕を閉じる。子供のように天真爛漫で、豪放でエネルギッシュで、度重なる浮気でフリーダを苦しめた肥満の大男ディエゴが発する、あの宙づりにされたまま凍りついた叫び。あの彼の絶叫のためだけでも、フリーダは幸せだったのだ、と私は思いたい。ましてや、フリーダの床で「ヴィヴァ・ラ・ヴィダ」と言いきかれたなんて、最高ではないか!

しかし、フリーダは彼女の幸せをすべて彼女自身の強い意志と純潔な過激性によって選びとってきたのである。メキシコという祖国への愛も、絵画への情熱も、ディエゴ・リベラやレオン・トロツキーとの恋も、レズビアンとの恋も、そして苦悩も死も、彼女はすべてを自らの手で動かしていったのである。この映画では最愛の男性ディエゴとの生活の他に、トロツキー

ととして写真家ニコラス・ムライとの恋の断片が描かれるが、そんなフリーダの恋にはいつもダンディだったハンガリー系ユダヤ人の父ギリエルモの面影がちらつく。死の床のフリーダが妄想する少女時代のイメージは、すべて父親につながるものばかりだ。意志の強い少女のフリーダ・コンプレックスが、ここにもほの見える。フリーダがディエゴと結婚した時、フリーダは22歳、ディエゴは43歳だった。ディエゴとは、まさにフリーダの父親コンプレックスの象徴が違ったのではないだろうか。しかし、ディエゴは同時にフリーダにとっての息子であり同志であり、そしてフリーダ自身でもあったのだ。フリーダの日記には、そんなディエゴという小宇宙をつづる言葉が小さな文字でいっぱい書き込まれている。



フリーダの絵の中で、なによりも悪夢のようなオブセッションとしてつきまとうのは「折れた背骨」と題された自画像だ。彼女はここに無数の剣と銃とギプスで武装した裸身を描いている。美術評論家のヘイデン・エレラはこの絵を「メキシコの聖セバスチャン」と呼ぶ。しかし、ここには三島田紀夫が魅せられ、ダヌンツィオがイダル・ルピンジスタインの姿に妄想した聖セバスチャンの官能性などはみじんもない。全身で苦痛に耐えるフリーダは、ここでふたつの瞳から大粒の涙を流している。イダル・ルピンジスタインとフリーダ・カーロ。ふたりの対照的な女による両性具有的聖セバスチャン。フリーダ・カーロは女そのものでありながら、しかしどこかに「女、を超えた性もゴージャスに生きぬいた」とはいえないだろうか。



▲フリーダ・カーロとディエゴ・リベラ
 ■1930年(23歳) リベラに依頼された壁画制作に同行しサンフランシスコに住む。最初の中絶。
 ■1931年(24歳) 6月 メキシコに帰国。11月 ニューヨーク近代美術館のリベラ回顧展に同行しニューヨークへ。生と死をテーマにした超現実的肖像画「ルーサー・パーバンの肖像」制作。
 ■1932年(25歳) 4月 リベラの壁画制作に同行しトロイトへ。
 7月 流産

フリーダ・カーロ

生涯と芸術

ヘイデン・エレラ著 野田隆・有馬郁子訳

絶賛発売中

「フリーダの芸術は爆弾に結んだリボンである」——アンドレ・ブルトン。壮絶な運命とたたかい、鮮烈な作品をのこした画家の華麗な生涯を、熱い思いをこめて詳細に綴る本格的力作評伝。図版多数。菊判488頁 5980円

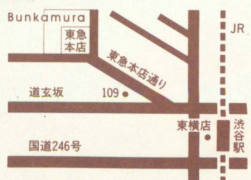
晶文社

東京都千代田区外神田2-1-12
 電話03-255-4501

6月待望の Bunkamura
 ロードショー ル・シネマ2

オフィシャルサプライザー

NEC 日本電気 NTT 第一生命 野村證券 HITACHI 東京銀行



特別鑑賞券¥1,300絶賛発売中! (当日¥1,700均一均一均一)

月～木	11:50	2:00	4:10	6:20	8:30
金～日	10:50	1:00	3:10	5:20	7:30

●(金)土のみ9:35PM追加上映 ●定員入替制
 ●お問い合わせ…Bunkamura 03-477-9264
 ●Bunkamura Member's Club 入会受付中
 お問い合わせ 03-477-9109